

第四編 附屬學校

第一章 姫路高等学校

一 発足の背景と設置

設置に関する建議書提出

高等学校進学希望者の激増期を迎えて、人口四四万人姫路市にとっても、高校入学難解消の問題は緊急を要する問題であった。松井茂雄は昭和三六（一九六二）年、東洋大学校友会兵庫県支部長であり、姫路斗南学院予備校校長として、石見元秀姫路市長を訪ね、東洋大学分校設置の意義と必要性を熱心に説いた。当時東洋大学では、産学協同システムによる工学部の昭和三六年開設も軌道にのり、総合大学としての発展途上にあつた。そこで松井は東洋大学常務会（剣木亨弘理事長、佐瀬恒、川西文夫、勝承夫常務理事）に対して、播磨臨海工業地帯における姫路市の存在意義、立地条件等の特性について詳細に説明し、加えて姫路市および隣接する都市を拠点として、東京白山、川越の工学部と関連性を保ちながら、これからの大学を樹立すべきであり、この附属高校は大学にとつても、必ずプラスになるであろうことを力説したのである。

昭和三六年六月五日、松井は石見市長、市議会議長連名で、東洋大学に対して「附属高校設置に関する建議書」を提出した。そして一〇月、東洋大学理事会は松井に対して「姫路市が東洋大学に、校地の総てを無償で供与し、大学の分校として誘致されるならば建議書を採択し、その折衝の一切を松井に一任する」という理事会決定を伝えた。こ

れを受けて松井は石見市長、姫路市議会に対して附属高校の設置趣意計画を説明し、石見市長と第三次会見の結果、同意を得ることとなった。

松井設置準備委員長と校地

昭和三七（一九六二）年一月劔木委員長、佐瀬常務理事、水越巖渉外課長の三氏が姫路を訪れ、石見姫路市長と正式会談に入り、東洋大学附属姫路高等学校設置準備委員長に松井を任命することとなった。四月二八日の東洋大学理事会は、「姫路に東洋大学附属高校の新設（ならびに大学機関の一部移転を含む）創設の建議書」の採択、開設を決定し、五月二九日の東洋大学評議員会の承認を得た。七月には兵庫県に対し、「東洋大学附属姫路高校認可申請書」を提出。八月に兵庫県私学審議会の現地視察および諮問会が開かれ、認可の内報を受けた。

昭和三七年九月二六日（後にこの日を創立記念日と定める）姫路市から、姫路市書写木ノ下一六九九番地に五万坪の土地が供与された。その校地で、劔木理事長出席のもとに起工式典が挙行された。この書写山は古くから人々は霊山として拝み、多くの修行者が山の霊力を身につけるためにやってきた。そして康保三（九六六）年、紫の雲に導かれて訪れたといわれる性空上人の入山によって、山の歴史に円教寺という祈りの象徴が生まれたのである。西の比叡山と呼ばれ、西国三十三カ所の第二七番札所として有名である。円融・花山両上皇はたびたび臨幸し性空上人に教えを受けた。この書写山を背に、夢前川の清流に近く、広がる田園を前にした緑の地であった。この地に昭和三八年四月の開校に向けて、急ピッチで工事が進められた。

一方、昭和三七年五月から附属姫路高校設置準備委員として、出口路子（ $\sim 61 \cdot 3$ ）、一〇月から坂本賢一（ $\sim 40 \cdot 3$ ）事務長、藤野和雄（ $\sim 54 \cdot 3$ ）会計主任の二名が東洋大学から着任。また力丸正規（ $\sim 44 \cdot 8$ ）、大久保（旧姓熊田）節子（ $\sim 40 \cdot 12$ ）が採用された。明けて昭和三八年一月から垣内欣哲（平成三年四月校長）、二月から本岡哲三郎（ $\sim 41 \cdot 3$ ）

が採用され、大久保強（平成三年四月教頭）が東洋大学から着任し、九名の準備委員で入学試験とその準備・事務処理が、松井が校長をつとめる斗南学院予備校（姫路市今宿）の狭い事務所で進められた。

開校と校章・校歌・校訓の制定

昭和三八（一九六三年）一月、松井は附属姫路高等学校の初代校長に就任し、一月一九日、外観成った建設中の校舎を囲んで、中学の三年生とその保護者、先生方、地元関係者多数を迎えて、現地説明会が行われ、二月、入学願書の受付が開始され、一九〇〇余名の受験生一人一人に、松井は眼底に痛みを感じながら、面接を行った。二月二日には、広い姫路市厚生会館大ホールを埋め尽した受験生が、緊張した静寂の中で、一斉に走らせる鉛筆の音は異様であり、壮観でもあった。入学試験終了後、龍野市の国民宿舎「赤とんぼ荘」を借り切り、二日間にあつて採点し、合格発表を無事に終えた。その後、合格者招集、後期入学試験問題作成、後期入学試験等、準備委員九名の激務のうちに、第一期校舎が竣工し、晴れやかに開校日を待つこととなった。

昭和三八年四月、土山太郎（ $\sim 55 \cdot 3$ ）教頭、藤原直利（ $\sim 43 \cdot 3$ ）主事、村本義一（ $\sim 43 \cdot 3$ ）調査部長、矢内実治（ $\sim 46 \cdot 3$ ）生活指導部長、飯田清（ $\sim 45 \cdot 3$ ）教務部長、松永安彦（平成三年四月教頭）以下八名の教諭と、その準備委員の垣内・本岡・大久保を加えた一七名の教諭と四名の時間講師、五名の事務職員、三名の校務員を加えた三〇名の陣容で、四月一〇日に六〇五名の新入生を迎え、入学式が新築成った校舎屋上で挙行され、翌日の一日には校旗入魂式が厳粛に行われた。校章は「観想の華」といわれ、「四君子」とも称される梅・菊・蘭・竹を組み合わせたもので、「高潔なること君子に似る」という意味を兼ね、本校教育のシンボルとされている。かくして、東洋大学附属姫路高等学校は姫路市民の温かい支援と、各家庭の理解と協力によって、順調な歩みを始めたのである。

東洋大学の建学の精神である「学問の基礎は哲学にあり」の理念に立ち、「家学一体」を教育実践の根本理念とし

て、生徒を中心として、家庭と学校とが一体となつて、教育を推進していくものであつた。

昭和三八年九月二六日、東洋大学常務理事の勝承夫（後、理事長）作詞、ビクター専属の平井康三郎作曲による校歌の発表会が、第一回創立記念日に催された。勝はその発表会の席上で「ふつくらとした感じをうたいあげたもので、教訓ではない。くりかえし歌っているうちに、このことを会得して欲しい」と述べた。そして創部もないブラスバンド部によつて、堂々と演奏され、将来の附属姫路高校の発展を讃えるかのように、書写の山に木霊した。この校歌の詞にある「自立・友情・英知」が校訓となっており、各教室に掲げられている。

二 研究教育活動

1 教育活動

特別進学クラスと選択授業の導入

昭和三八年四月、開校と同時に、入学試験の成績によつて、上位から四クラスを選抜（二・三年次には実力テストの成績の結果によつて、それぞれ一〇名前後の入れ替えが行われた）。三年次には文科系一クラスを加えて五クラスとし、うち一クラスは理工コースを希望者のなかから、成績により選抜した。また就職クラス二クラスを設け、簿記、珠算をカリキュラムの中に組み入れた。しかし昭和四二年度には一年次から、東洋大学工学部へ進学する生徒のために、「工学部進学クラス」を新設し、英語・数学・理科の三教科の授業時間をふやし、三カ年を通じ、毎年夏休みには約二週間、東洋大学の工学部の先生方が来校し、奥田恵孝教授、大山勲教授、土屋正夫講師、柴田晴彦講師などの指導で、この工学部進学クラスは、昭和四三年からは一

表-1 昭和63年度教育課程表

教科	学年 科目コース	第1学年			第2学年				第3学年			
		普通	特文	特理	普文	特文	普理	特理	普文	特文	普理	特理
国語	国語Ⅰ	6	6	6								
	国語Ⅱ				5	5	3	3				
	国語表現								2	2		
	現代文								4	4	2	2
	古典 国語演習				*4	*4	*4	*4	3	3		
社会	現代社会	4	4	4								
	日本史				5] *4	5] *4	*4	*4	5	5		
	世界史				5] *4	5] *4	*4	*4	3	3		
	地理				*4	*4	*4	*4				
	倫理社会 政治経済				*4	*4	*4	*4			2	2
数学	数学Ⅰ	6	6	6	*4	*4	*4	*4	2	2		
	数学Ⅱ				3	3						
	代数幾何						4	4				
	基礎解析						4	4				
	微分積分 確率統計										4 4	4 4
理科	理科Ⅰ	4	4	4								
	物理学				3] *4	*4	5] *4	5] *4			5	5
	化学				3] *4	3] *4	5] *4	5] *4			4	4
	生物				*4	3] *4	*4	*4				
保健体育	体育	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	柔道	1]	1]	1]	1]	1]	1]	1]				
	剣道	1]	1]	1]	1]	1]	1]	1]				
	保健	1	1	1					1	1	1	1
芸術	音楽Ⅰ											
	美術Ⅰ	2]	2]	2]								
	書道Ⅰ	2]	2]	2]								
外国語	英語Ⅰ	6	6	6								
	英語Ⅱ				5	5	5	5				
	英語ⅡB								4	4	4	4
	英語ⅡC								4	4	4	4
	英語演習				*4	*4	*4	*4				
家庭	家庭一般											
特別教育活動		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計		34	34	34	34	34	34	34	32	32	34	34
クラス数		10	1	1	9	1	1	1	7	1	1	1

注：] 印はその組合せ科目により1科目選択 *印はその全科目より2科目選択

学級増設し、一年次から二学級とした。文科系の特別クラスは当初と変わらず四学級であった。しかし昭和四六年度からは工学部進学クラス二学級は変らなかつたものの、文科系選抜クラスは廃止され、一般クラスに編入された。だが文科系大学の進学が不振に陥つたこともあって、本校独自の「新教育計画」の検討に入り、昭和五二（一九七七）年創立一五周年に当たり「特別進学クラス」として、文科系一クラス、理科系一クラスを設置し、大学進学への授業内容の充実を図り、今日まで継続している。その内容というのは、平日放課後の一教科一〇〇分の授業（文科系英語・国語・社会。理科系は英語・数学・理科）および、休暇中の補習授業（年間、二五日～三〇日）の義務化である。昭和五二年から昭和六二年まで、夏休みの八月一七日～二三日まで、鉢伏高原の民宿での強化補習合宿を行った。東洋大学からも文学部の、神作光二教授、藤野文雄助教授、河地修助手、西田義和講師、三浦誠講師、永井豊実講師などの指導で、大きな成果をあげることが出来た。

昭和六一（一九八六）年四月、附属姫路高校では「新教育五カ年計画」がスタートし、「男女共学検討」部門と並行して、「選択授業の導入」部門が設置され、他校に類をみない形の「自由選択授業」が導入された。それは昭和六三年度の二年次から、一〇教科目中（国語・日本史・世界史・地理・倫理社会・数学Ⅱ・物理・化学・生物・英語）から、二教科（二教科週四時間）を生徒に自由に選択させ、履修させるものである。こうした試みは他に例をみないので、成績も徐々に向上し好結果をあげている（表一）。。

2 クラブ活動・生徒会活動

体育クラブ

昭和五二年八月二〇日、東洋大姫路高校野球部は、第五九回全国高校野球選手権大会において、見事深紅の大優勝旗を手にした。

大空にそびえる白鷺城の天守閣のように、堂々とした全国制覇であった。それは二五年ぶりに甲子園のおひざ元、兵庫県にひるがえった姫路高校の、創立一五周年目の記念すべき偉業であった。

野球部――昭和三八年四月、開校と同時に創部、昭和四四年七月、第五一回全国高校野球選手権大会に、杉本正時（東洋大―新日鉄広畑）の投打にわたる活躍で、兵庫県大会に初優勝し、全国大会に出場した。創部六年目にしての快挙であった。昭和四七年の第五四回大会では、山川猛（駒沢大―西武ライオンズ―阪神タイガース）、平川高之（東洋大―新日鉄広畑）らの活躍で、千葉代表の掛布雅之（元阪神タイガース）のいた習志野高校を5対3で降し、高らかに勝承夫作詞の校歌が、初めてテレビやラジオを通じて、全国津々浦々に流れた。続いて、昭和四八年の第五五回大会、昭和四九年の第五六回大会と、三年連続全国高校野球選手権大会出場、快挙を達成した監督の田中治氏が体調を崩し、再度、梅谷馨に交替した。続いて昭和五一年春の第四八回センバツ高校野球大会に初出場した。弓岡敬二郎（オリックス）、松本正志（オリックス）、小南扇四郎（日体大―神戸西高教）らの活躍で、初のベスト四入りを果たす。続いて、昭和五二年の第五九回全国高校野球選手権大会では、松本正志、田村敏一（東洋大―川鉄千葉）、松田裕之（東洋大―本田技研）、安井浩二（明治大―佐々木スポーツ）、平石武則（プロゴルファー）らの活躍で、二回戦、千葉商を四対〇、三回戦、浜田高を五対〇、準々決勝、豊見城高を八対三、準決勝、今治西を一对〇（延長一〇回）、そうして決勝戦は東邦高校を延長一〇回、安井の劇的サヨナラ三ランホームランで、四対一と降して、全国高校野球選手権大会出場、五回目にしての全国制覇であった。翌日の二二日、姫路に凱旋した選手たちを迎えてくれた、一三万人（姫路署推定）の市民がつめかけ、熱気と興奮にわき返った。昭和五四年春の第五一回センバツ高校野球大会に二度目の出場を果たし、萩原健吾（関西大―大阪ガス）、岡田龍生（日体大―履正社高教）、前田弘樹（東洋大―グローリー工業）らの活躍で、ベスト四入りを果たす。昭和五七年、第六四回全国高校野球選手権大会では、田中泰（東洋大―日通浦和）、蛭田広則（東洋大

トヨタ自工らの活躍でベスト四に入る。昭和六〇年春の第五七回センバツ高校野球大会・第六七回全国高校野球選手権大会に出場し、豊田次郎（川鉄神戸）、阿山正人・大墨弘幸（新日鉄広畑）、石田峰美（東洋大―東芝府中）らが活躍するも、一・二回戦で敗退する。しかし昭和六一年には、長谷川滋利（立命館大―オリックス）、嶋尾康史（阪神タイガース）らの活躍もあり、ベスト八入りとなる。また国民体育大会では、昭和五二年（青森県）では準優勝、昭和五七年（島根県）は一回戦、昭和六一年（山梨県）は準優勝であった。

卓球部——昭和五四年に大阪で行われた全国高校総合体育大会（以降は全国高校総体という）に初出場を果たして以来、昭和五五年から五七年まで、個人戦、あるいはダブルス戦、また全日本卓球選手権大会ならびに国民体育大会に出場してきた。昭和五八年からは、基礎がしっかり出来上がり、団体戦、個人戦とともに、兵庫県大会に優勝し、平成三年まで、全国高校総体に七年連続、八度の出場を継続中である。また春に行われる全国高校卓球大会には近畿代表として、五年連続出場を果たしている。女子生徒が入部してきた平成三年度は、男女アベック優勝を果たし、全国大会に出場し、女子の柴田尚美は、バルセロナオリンピック、アジア・ゾーン予選会に出場した。

柔道部——昭和四一年に、本校初の全国高校総合体育大会に出場を果たして以来、輝かしい部の伝統を築き、めざましい発展を遂げている。昭和四一年の全国高校総体（青森県）、国民体育大会でベスト一六の優秀賞を受ける。昭和四九年には樽家が、全日本ジュニア選手権大会（北海道）、国民体育大会（石川県）、全国高校総体（三重県）に出場、三つのタイトルを獲得した。昭和五二年には山崎が、国民体育大会（和歌山）に出場する。昭和五四年には、第一回全国高校選手権大会（日本武道館）に団体戦に出場し、ベスト八で敢闘賞を受賞する。また全国高校総体（滋賀県）で生田が、個人中量級日本一となり、国民体育大会（宮崎県）でもベスト八となる。昭和五六年には全国高校総体（千葉県）に、団体戦で出場し、ベスト一六の優秀校の表彰を受け、国民体育大会（島根県）に、野村・三木が出場した。昭和五

七年には全国高校総体（鹿児島県）団体戦に出場し、ベスト一六で優秀校の表彰を受ける。また同年、国民体育大会（島根県）に藤原・浦が出場する。昭和六一年には近畿高校新人大会、個人の部一年生に、内海が優勝、昭和六二年、第一〇回全国高校選手権大会（日本武道館）の団体戦に出場する。昭和六三年の全国高校総体（兵庫県）で個人戦に、内海九五kg、藤井九五kgが出場し、内海はベスト八に入賞する。

剣道部——昭和四三年に兵庫県新人戦で初優勝を果たし、近畿大会においても強豪PL学園高校を破って優勝して以来、数々の輝かしい伝統を築いてきた。昭和四五年より四八年まで、連続兵庫県の頂点に立ち、全国高校総体・国民体育大会に常連校として、東洋大姫路高校の名を高からしめた。その間、個人戦において、井関・岩本・寺田は、特にめざましい活躍をし、最優秀選手に選ばれる。

その後、昭和五二年から六三年まで、連続して全国高校総体に出場する。特に昭和六三年には、全国高校総体（兵庫県）の個人戦で、森本浩蔵が個人戦で、優勝した香川県の琴平高の福井選手に延長七回の末、惜しくも破れたが、優秀選手賞を受賞する。

弓道部——昭和四八年に部員も顧問も素人の集まりからの創部で、秋季県大会初出場の惨敗と悔しさが、部活動の活力となる。昭和五一年の兵庫県総体において、個人戦、一・二・三位を独占、第二一回全国高校総体、個人戦に、中井・石川の二名が、全国大会初出場を果たす。昭和五二年、国民体育大会（青森県）に小出選手、昭和五五年の栃木国体には福岡選手が、さらに同選手は昭和五六年、全日本遠の大会において優勝。その後全国大会には団体戦参加を目標に努力、昭和五七年の第二七回全国高校総体団体競技に初出場、予選成績、第一位で通過するも、決勝トーナメント一回戦で、前年まで四年連続準優勝の、愛知県の福江高校に惜敗した。

昭和五八年の全国高校総体、個人戦に山崎選手が、同年の第三八回赤城国体において、西沢・吉川選手が、近的・遠

的・総合の三種目とも準優勝を遂げた。昭和五九年全国高校総体団体戦に出場、同年の第三九回の奈良国体において、大谷選手が遠的競技において三位入賞、昭和六一年、全国高校総体団体戦に出場、決勝トーナメントに進出し善戦。同年第四一回山梨国体に、上田、福岡の二選手が出場。昭和六二年の全国高校総体個人戦に宮脇選手が出場するなど、創部一四年の短期間であったが、全国大会通算出場一回を数え、昭和六三年には全国総体（兵庫県）の団体戦において、準優勝を果たし、高校弓道界において、名実ともに東洋大姫路高校が、全国に認知されるに至ったのである。

陸上競技——昭和四一年の兵庫県高校総体において、森田政幸が一一〇メートル・ジュニア・ハードル、走高跳、三段跳の三種目制覇という偉業を達成し、男子最優秀選手に選ばれ、第八回全国高校総体ならびに第二一回国体に出場した。その後全国大会出場がないのは寂しい。

ボクシング——昭和四二年の第二二回国民体育大会に西納康博が、昭和四三年に岩田勝一が、昭和四七年には南雅明が出場し活躍した。

自転車競技——昭和四八年の第二八回国民体育大会に木戸新八が、昭和四九年には植野繁治・黒柿幸司が出場した。ゴルフ——昭和五九年の創部であったが、昭和六一年に紺谷三大が、全日本ゴルフ選手権で七位に入賞した。

以上、体育クラブを紹介したが、兵庫県高校総合体育大会の総合成績では、昭和五二年に男子総合三位、昭和五四年には優勝、昭和五六年には三位、昭和五七年は二位、五八年、六〇年、六一年は三位、六二年は二位であった。これらの成績は柔道部・剣道部・卓球部・弓道部の団体戦の得点によるものである。

文化クラブ

写真部——昭和四三年一二月、東京デザイン学院・専門学校主催の「全国写真コンクール」において銀賞を受賞、個人で西松利幸君の力作、「ノーモア・ヒロシマ」が入賞した。

考古学部——遠い祖先から伝えられた尊い文化遺産を調査、研究するこのクラブでは、多くの姫路近郊の遺跡を発

掘調査し出版した研究書、および調査報告書は、学界においても高く評価されている。

「高砂市阿弥陀古墳群」(高砂市教育委員会)

「姫路小山弥生遺跡」(東洋大学附属姫路高校)

「三木市高木古墳群」(三木市教育委員会)

「播磨大中」(播磨町教育委員会)

「印南野」Ⅰ・Ⅱ(加古川市教育委員会)

「播磨弥生文化研究」(東洋大学附属姫路高校)

「姫路市丁古墳群」(東洋大学附属姫路高校)

「兵庫県文化財調査報告5 門前遺跡」(兵庫県教育委員会・龍野市教育委員会)

「播磨土師器の研究」(東洋大学附属姫路高校)

「加古川市砂部遺跡」(加古川市教育委員会)

「小田遺跡」(建設省)

「長尾タイ山古墳群」(龍野市教育委員会)

「播磨大中遺跡の研究」(播磨町教育委員会)

などがある。

吹奏楽部——昭和六〇年に西日本ジャズ・フェスティバル高校の部において、優秀賞を受賞する。その他毎年、姫路市民会館において定期演奏会を行っている。

生徒会活動

開校と同時に「生徒会」が組織され、各クラブの予算折衝と配分決定、文化祭、体育祭の企画・運営と学期ごとのクラス役員（ホーム・ルーム委員・風紀委員・文化委員・代議委員・体育委員）の改選と、年一度の生徒会本部役員の立候補と選挙があった。しかし昭和四四年に、それまで校則で「頭髮は丸刈り」を規定していたのに対して、生徒会は「長髪自由化」を求めて全校集会を幾度となく開催した。そしてこの生徒会の要求に対して、職員会議において慎重に検討した結果、昭和四四年六月一八日、池田希生徒会長に対して、条件つき「長髪許可」をするに至った。昭和五〇年代に入り、生徒会が中心となって生徒に呼びかけ、献血運動を推進した結果、昭和五六年七月一五日、厚生大臣村山達雄より、感謝状を受賞するなど、積極的に地域社会にも貢献している。

三 運営の変遷その他

施設・設備

昭和三七（一九六二）年九月二六日、校舎起工式典が、姫路市書写木ノ下一六九九番地で挙行され、劔木亨弘理事長の「歟入れの儀」が執り行われた。この日を附属姫路高等学校の創立記念日とした。昭和三八（一九六三）年三月二〇日、第一期校舎竣工、昭和三九年三月二一日、第二期校舎竣工、昭和三九年一月二五日、第三期校舎本館工事が、株式会社神崎組施行により完工し、全長一二六メートル、普通教室三四、特別教室七、図書室その他四教室、総延べ面積、七〇一二・九平方メートル、四階建（一部三階）の堂々たる校舎である。昭和四〇（一九六五）年一月二六日、第一体育館兼講堂が竣工、総延べ面積二四八〇平方メートルであった。昭和四一年一月一六日、運動部の部室が竣工。鉄骨ブロック造平屋建て延べ面積、二〇九平方メートルのものであった。昭和四二年一〇月一二日、テニスコート二面が完成。昭和四二年一二月三〇日、食堂・図書館棟が施工、一階は食堂、二階が図書館で、鉄骨ブロック

表-2 卒業生数

卒業回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
卒業年度	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
卒業生数	579	630	575	574	599	594	527	524	526	538	463	417	459
卒業回	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	計		
卒業年度	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62			
卒業生数	424	436	450	475	355	425	419	478	525	468	11,460		

造、総延べ面積、七四六平方メートルのものであった。昭和四五年三月三十一日、合宿所が竣工する。木造瓦葺平屋建の、九一・八平方メートルであった。昭和五〇年二月二八日、第二体育館が竣工、鉄筋コンクリート二階建、延べ面積、一三九八・四平方メートルで、一階は柔道場・剣道場、二階はフロアである。また同時に弓道場が竣工、鉄骨ブロック造平屋建、延べ面積、二八四・八六平方メートルであった。昭和六二年六月二八日、第二グラウンド（野球場）が、学校から四キロメートル離れた、姫路市打越字正ノ坪に竣工した。土地総面積、六二万七七〇〇平方メートル、グラウンド面積、一万三六五〇平方メートルである。以上が主な施設・設備であるが、その他としては、昭和四三年二月九日には「渡り廊下」（本館―食堂―第一体育館）の連絡廊下、一八〇・〇〇平方メートルが、昭和五〇年九月一日には（本館―第二体育館―弓道場）の連絡廊下、鉄骨造平屋建、延べ面積、四九五・三四平方メートルが完成した。また校舎周辺の整備も徐々に行われ、昭和五〇年一月三十一日に校舎前庭が、昭和五三年五月三十一日校内舗装工事が完了。昭和五四年三月一日には校門東側、昭和五四年二月二〇日に校門西側の造園工事が完了した。

生徒数と大学進学状況

第一次ベビーブームの昭和三八年に定員五五〇名で開校したが、昭和四五年卒業の六期生まで、定員を上回って入学させていたものの、その後は定員を下回っている（表-2）。また大学進学では昭和四六年度から文科系選抜クラスの廃止で進学不振に陥り、昭和五二年度から特別進学ク

ラスの復活と補習授業と強化補習により、大きな成果をあげている(表-3)。

校長人事

(1) 初代松井茂雄校長、土山太郎教頭、坂本賢一事務長(40・3)、藤野和男事務長(40・4)
 松井校長は東洋大学附屬姫路高校を「私立学校の教育は、画一的な知育偏重の古い殻を脱却して、新しい世代にあった青少年の育成と、望ましい有為な人材を養う高校にする」ことを根底に、「個性ある人間の育成」「特色ある人間作りの推進」「社会・公共に役立つ人間形成」が大切であり、これらが「真の教育である」として、校長自らの指揮のもとに、特性ある教育を推進した。受験生一人一人に対する校長面接もその一つのあらわれであり、能力別クラス編成、週番制度の確立、父親参観日、公開授業、月一回の実力テスト、全生徒への家庭訪問、善行表彰、清掃のクラス表彰、毎月、当該月誕生生徒への激励とお祝いを、全校生徒の前で公表した。また姫路から遠く離れて、大学生を送っている大学生を励ます激励会を、東京、名古屋、大阪で開催し、大部分の学生が参加したことは、特筆すべきことであろう。また地区別育友会を開催し、担任と保護者との懇談を行った。また生徒保護者、地域住民の年寄りのために敬老会を開催した。こうして本校教育に情熱をもって推進してきた松井校長も、昭和四六年の春より、開校時の過労がもとで病床に臥す日が続いた。その空白を埋め、松井の意志を継承し、推進したのが土山教頭であり、竹中清主事、岡善一教頭、安積忠義副校長であった。昭和四九年に名誉校長の称号を受け、三月三十一日をもって退職する。

(2) 高尾太第二代校長、安積忠義副校長、土山太郎教頭、正木義夫教頭、藤野和男事務長(54・3)

昭和四九年三月三十一日に三重県津工業高校を退職した高尾太が、四月一日第二代校長として就任した。昭和四七年から東洋大学附屬姫路高校の教職員組合と係争中だった地方労働委員会の和解が、昭五〇年一二月六日に成立した。この時高尾は、当時育友会長であった土井昭平氏らとともに、私学における育友会を長期展望の上に立って考察し、

表-3 東洋大学推薦入学・他大学合格概況

		進 学 者 数																										
		東 洋 大 学 推 薦 入 学 者 数																										
学部	学科	文					経済	経営	法	社 会				工				短大	東洋 大学 合計	他大	短期 大学	総合 計						
		哲	イン ド	中国 哲学	英 米 文	教 育	経 済	経 営	法 律	経 営	社 会	応用社会			機 械	電 気	応 用	土 木					建 築	情 報	日 本	英 文	観 光	
												マ ス コ	社 会 福 祉	社 会 心 理														図 書 館
41	1			2	3	3	3	3	3	3	4	4	3		3		2	3	3	2	2			50	208	258		
42					1	3	4		3	4	4	2	3	2		5		4	3	4	4	4		2	52	184	236	
43	1			1	4	2	3	3	4	4	5	5	5	4		4		4	4	4	3	4		2	66	161	227	
44	1	1		2	3	3	3	4	4	4	5	4	2	4	1	1	1	4	4	2	4	4		2	63	221	284	
45	1				3	2	4	2	4	3	4	3	2	3	1	1	1	7	5	5	5	4		3	63	158	221	
46							1		4	4	4	4	4	3	1	1		6	4	3	6	5		1	51	148	199	
47	3					1	1		3	4	4	2	2	2	1	1	1	6	5	3	3	4		3	49	144	193	
48	1				3	4	1	3	5	5	5	4	3	4	1	1	1	1	6	5	5	4	4			66	154	220
49	1				1	2	3	3	5	4	4	4	4	3	1	1	1	5	5	5	4	4			60	167	227	
50	2			1	2	2	1	3	5	5	5	5	5	5	1	1	1	1	6	6	5	5	4		71	203	274	
51	2			1	2	2	2	3	5	5	5	5	4	5	1	1	1	1	5	3	4	3	3		63	170	233	
52					2	2	1	3	5	5	5	5	5	5	1	1	1	1	4	4	1	3	4	1	1	60	142	202
53	1			1	3	2	1	3	6	6	7	5	7	7	1	2	2	1	5	6	2	5	4	5		82	153	235
54					3	2	1	3	7	7	6	6	6	7	2	2	1		6	5	2	4	4	4	1	79	147	226
55		1	1		3	2	1	3	7	6	6	7	6	6	1	1	1		6	5		3	5	1	2	74	163	237
56		1	1		2			3	7	7	7	6	6	7	1	2	2	2	3	5		1	3			66	135	201
57					4	3	1	3	8	8	8	8	8	7	1	2	3	2	5	5	1	1	3	2	1	84	123	207
58	1				1			1	6	7	7	6	6	6	2	2	1	1	2	5	1	2	4	1		62	120	182
59				1	2	1	1	3	7	7	6	5	5	4	1	2	1	1	4	6	1	2	1		1	62	121	183
60					4			3	7	7	6	6	6	5	2	2	2		4	4	3	1	2		3	67	171	238
61					2	1	1	3	7	7	7	6	6	5	2	2	2	2	2	2	2	2	2		1	64	139	203
62		1			4	1	1	2	9	8	8	8	8	7	2	2	2	2	4	3	1	2	2		2	79	163	242
63	1			1	3	2		2	7	8	8	8	6		2	1	1	2	3	2		3	3		2	65	167	232

本来の業務を内容とする「育友会」に加えて、体育クラブの充実と振興のために「体育振興会」を、さらに教育の充実と補習授業や強化合宿等の振興のための「教育振興会」の三つの柱を樹立した。その結果は体育クラブの飛躍的発展となり、大学進学の上へとなったのである。昭和五一年九月の台風一九号による集中豪雨により、校内の谷川は書写山から流れ出た濁流によって埋められ、校内とその前庭、校門付近にあふれ、大きな災害を被った。

高尾はさっそく関係各庁への陳情等の結果、災害指定を受け、前庭からロータリー、校門、校内の谷川と池の大改修工事が施工され、学校の教育環境が一新した。かねてから高尾は「野球部をこの学校の機関車にするのだ」との信念に燃え、大久保野球部長に対して「甲子園に出場するだけでなく、甲子園で勝つチーム作りを命じていた」。その結果が、昭和五一年春の野球部のセンバツ高校野球大会ベスト四であり、昭和五二年の第五九回全国高校野球選手権大会の全国征覇であった。昭和五四年春の第五一回センバツ高校野球大会に出場したが、本校が初戦に出場する四月一日の前日、高尾は「初戦だけは現職として、応援したかった」という言葉をのこして退職、正木義夫教頭も同時に退職する。

(3) 板東運雄第三代校長、原田良祐教頭、新林茂教頭、池内雄三主事、村野一治事務長（54・4～57・3）、横田行忠（57・4）

昭和五四年四月四日の二回戦、第三試合が行われる甲子園球場に、初めて姿を見せた板東校長は、「甲子園球場には二度ほど来たことがあるが、校長としては初めてで感慨深い。野球が強いのは本校の伝統としてだけでなく、姫路市民の誇りともなっている。今後とも野球を大切にすることの方針を、これからも変えるつもりはありません。これから対戦する大分商業は、私の居りました宮崎の隣の県ですが、是非頑張って勝利してください」と選手を前にして激励した。

結果は一二対六で勝ち、続く準々決勝には池田高校と対戦、雨中の打撃戦の末、八対七で制し、ベスト四入りを果たした。またこの年から情操教育の一環として「演劇鑑賞会」を実施することになり、生徒は「生」の役者の演技を、目近で体験することとなった。また昭和五十六年度から本校独自の「給費奨学制度」を設け、経済的に恵まれない「学力」「人物」ともに優秀な生徒に対して、一学年三名が給費されることとなる。昭和五十七年二月一六日、病床にあった初代松井茂雄校長は享年七三歳をもって永眠され、翌昭和五十八年一月二九日、本校講堂において、厳かに学校葬を執り行った。板東は東洋大学創設の精神に立ち返り、勉学とスポーツとを両立させる「個性ある教育の推進」に専念し、昭和六〇年三月、野球部の第五七回センバツ高校野球大会出場とともに、三一日退職する。

(4) 石井一第四代校長、原田良祐教頭、垣内欣哲教頭、横田行忠事務長（42・3）

昭和六十一年、田中栄次理事長より「姫路高校の方向性と具体策の検討について」の諮問が提示された。これを受けて附属姫路高校では、四月に「新教育五カ年計画」を発足させた。「施設設備」「選択授業」「男女共学」等の問題が提起された。八月二七日・二八日の管理職研修会（甬水会館）において、この「選択授業」「男女共学問題」が議題の中心となった。昭和六十二年三月上旬、「第一回姫路高校専門委員会」（甬水会館）が開催された。大学からは田中栄次理事長、菅野康雄、藤井潔常務、龍崎芳郎理事、小鷹健一評議員、吉田辰雄教務部長、内藤勇次兵庫教育大学教授の専門委員と、姫路高校からは石井校長以下管理職が参加して、二つの議題について意見を交わす。続いて四月、五月に開催された会議で、「選択授業」については昭和六三年度の二年次から実施することを決議した。一方「男女共学問題」については引き続き検討され、七月に「専門委員会」から「男女共学の方向」で、答申提示があり、一二月の東洋大学常務会、翌年の昭和六三年三月の評議員会で、昭和六四年（平成元年）度から「姫路高校男女共学制実施」の最終決定がなされたのである。

育友会・同窓会活動

育友会の組織は昭和三八年の開校直後に結成され、以後本校教育を側面から支援して結成された。創立五周年には「育友会記念事業」として「食堂・図書館棟」を、保護者の協力のもとに建設した。またその他、学校行事、教職員・育友会員相互の厚生事業、教職員の研修補助など、育友会本来の業務活動を内容とするもので、本校教育に不可欠の組織として今日に至っている。昭和五〇年、第二代高尾太校長は、当時育友会長であつた土井昭平氏をはじめ、育友会本部役員の方々と、将来展望の上に立つた育友会活動について、協議し、協力を得て、従来の育友会組織の他に、体育クラブの充実と振興のために、「体育後援会」、さらに文化クラブと本校教育の充実と振興のための「教育振興会」の三つの組織を確立した。その結果、体育クラブのめざましい飛躍があり、非行生徒の減少、大学進学の躍進となったのである。昭和五四年、第三代板東運雄校長は情操教育の必要性を痛感され、その一環として、生の役者の演技を自分の目と肌で感じさせる「演劇鑑賞」を、さらに経済的に恵まれない、学力・人物ともに優秀な生徒に対して、授業料を給付する「東洋奨学生制度」を設けた。

また、同窓会は、昭和四一年、第一期生五七九名が卒業し、初代会長に加藤昌二氏（53・8）が選ばれ、第二代会長岸本文義氏（53・8）、第三代秋山政一氏（61・8）、第四代阿部鉄郎氏である。この間、本校教育に側面から献身的に協力と援助を行ってきた。スキーバスのチャーターとスキー教室。本館各階の冷水器の設置。全国大会出場クラブへの助成。初代松井校長の胸像建立。マイクロボスの購入と学校への貸与等であり、昭和五二年と六二年に出版された「東洋会名簿」は数名の手作業によって出版されたものであった。

四 現状と課題

特色ある教育を目指して

昭和五〇年代から、ひたすら急坂を昇り続けてきた中学卒の生徒数は、平成元年度をピークとして、急激に減少を続けている。こうした児童生徒の急減は私立学校の運営上、ここ数年が生き残りをかけての、最も重大かつ深刻な問題となっている。こうした点から近年、各私立高校は「特色ある教育を目指し、苦慮し、模索を試みている。例えば外面的試みとして「制服の改定」「斬新な校舎・教室」「外国の学校との姉妹提携」「交換学生制度の導入」「特定クラブの強化・人材確保」等であり、内面的試みとして「コース制の導入」「少数精鋭指導による有名大学への合格率向上」「全国大会出場への強化策」「社会福祉活動への積極的な取り組み」等、学校のイメージ・アップを図る方策が実践されている。本校においても数年前より、「新教育計画」に基づいた検討と研究により、実践されている(1)(2)項もあり、今後検討を要する(3)(4)項もある。

(1) 偏差値を上げることが目的としてアピール

本校は東洋大学の附属高校としての特色を生かし、かつ質的向上を図るために「特別進学クラス」の育成と、昭和六三年度から「自由選択授業」を導入し、生徒の学習意欲を向上させる意味において、効果を上げている。

さらに平成元年度より「男女共学制」を導入したことにより、姫路高校の「イメージ・アップ」と「質的充実を図る」ことよって、生徒減少期におけるレベルの維持を図っていることとしていこうとしているのである。

(2) 全国大会出場のクラブを目玉としてアピール

スポーツの人気に対するマスコミの報道は、異常なほど加熱気味であり、これを利用して生徒募集のバネにしよう

とする学校は、近年多くなっている。特に高校野球で甲子園に出場したことで、その宣伝効果をそのまま生徒募集に直結させ、入学志願者を急増させ、同時に生徒のレベル・アップにもなった学校を数多くあげることが出来る。

本校においても平成三年度より「スポーツ推薦入学」を導入した。

(3) 大学と一貫教育の確立

本校は東洋大学の附属高校としての特性を生かした大学・高校の一貫したカリキュラムの導入を考えるべき時にきている。例えば、高校において「英語」の他に「第二外国語」を履修させ、大学のカリキュラムと接続させる試みも必要ではないだろうか。

(4) 海外留学・海外研修の導入

近年、教育の「国際化」が人気を呼び、大学名も「某国際大学」に変更したり、「国際学科」を設ける大学もあるくらいである。これはこれからの日本が国際交流の中心的役割を果たす「豊かな国際感覚」と「優れた外国語能力」を身につけた人材を育成することに重点を置く狙いがあるからである。本校においても、徹底した外国語力の育成が必要で、夏休み期間中の海外研修制度の導入も、実現に向けて検討する必要があると考える。

(大久保 強)

第二章 牛久高等学校

一 発足の背景と設置

設立の経緯

附属牛久高等学校は、茨城県牛久市柏田町一三六〇番地の二（旧稲敷郡牛久町大字柏田字宮台）に、昭和
三九（一九六四）年四月一日、全日制課程男女共学の普通科、入学定員一五〇名で開校した。

昭和三八年、ようやく高等普通教育の普及が著しく、また戦後のベビーブームに生まれた子供達が高校生の年代となり、はたまた国による首都圏整備の一環として研究学園都市構想の検討が浮き沈みするなかで、町当局による高等学校誘致の動きが出てきた。前年旧牛久中学校と旧岡田中学校との統合が町議会で議決され、旧岡田中学校跡の利用について議員協議会がかきねられた。当時の川村衛町長は「この敷地の大部分は柏田の寺田小左衛門家の篤志寄付であり、岡田地区教育の発祥の地であるからぜひ教育機関を設置したい」との政治判断をし、ついに議員協議会を動かし高校誘致に踏み切った。五月、当町在住の東洋大学坂本市郎助教授が町長室を訪ねたことから、建設が具体化し実現することとなった。町長の先見と地元熱意から、大学当局でも町の提案をうけて設置計画の具体化が進められた。六月四日、赤坂プリンスホテルで理事会が開かれ、理事長劔木亨弘、常務理事川西文夫ら一四名の理事の出席を得て、学校設置の件が全員賛成で決議された。「東洋大学附属牛久高等学校設置計画書」が作成され、翌五日「附属牛久高等

学校設置準備委員会」が発足した。委員会には鷺山重雄調査室長が委嘱された。一方、二〇日の町議会において「財産の寄付について——東洋大学牛久高等学校設立用地——」の件が審議された。東洋大学へ旧岡田中学校跡地を寄付して高校を誘致すること等が全会一致で決議され、七月五日付けで牛久町長川村衛から学校法人東洋大学に対し、正式に寄付申し込みがなされた。

設置認可と開校

昭和三十八年九月一二日、設置者学校法人東洋大学（理事長劔木亨弘）は、「東洋大学附属牛久高等学校設置許可申請書」を茨城県知事岩上二郎宛提出し、一二月一七日付で設置認可を受けた。申請書には本校の設置目的が記され、「本学建学の『護国愛理の精神』を基底として、全日制高等普通教育及び専門教育を施し、国家及び社会に有為な人材を養成することを目的とし、特に社会的使命達成のための品性の陶冶と個性の確立を目標」とし、「男女共学の高等学校とする」と明示された。申請書提出から間もない一〇月には、町庁舎の一室に開設事務所を開き、事務長に井出耕太郎を任じた。入学事務の処理を中心に生みの苦労が続いた。県下在住の校友の協力を得るべく懇談会がもたれ、また、茨城・千葉両県にまたがる通学可能区域内の中学校を歴訪し、開校の趣旨を伝え、生徒募集への協力を依頼した。校舎の修復工事も山本工務店によってなされた。

明けて三十九年、二月一六日入学試験、一九日合格発表、そして、四月一日、初代校長に福原富三郎が着任し、教頭土屋重徳、教務主任田代通広、教諭・講師一三名、事務長井出耕太郎ほか職員三名で開校した。晴れて九日、第一回入学式が挙行され三六一名の新入生を迎えたのである。五月二二日、土浦京成ホテルにおいて盛大に開校式を行った。何かと地元の協力を得ることが多く、一〇月九日には牛久町長より応援旗を、町民より幔幕を贈られることとなり、佐藤常務、鷺山調査室長、坂本助教授も来校し、贈呈式が行われた。四〇年三月には勝承夫作詞・平井康三郎作曲による校歌が制定された。

二 研究教育活動

1 教育活動

教育活動の推移

本校では、既述の教育目標のもとに教育課程を編成しているが、生徒の進路状況も考慮し、随時研究し実践している。昭和五〇年度卒業生（第一〇回生）の頃から大学進学者が就職者を上回るようになり、六〇年度（第二〇回生）以後は三年生においても大学進学希望者が在籍の七割を下らない状況となった。この推移の中で、五七年度入学者より大幅な改訂を行った。同年度に施行された文部省学習指導要領を基礎に、生徒の進路、能力、適性に応じた教育を求めて改編している。社会・理科科目の選択制、数学・英語の習熟度別編成（英語は五九年度より）、商業科目の廃止、などである。一年次は全クラス共通で、将来の進路に必要な基礎科目を修得する。特に、英語力の充実を図るためLL教育を導入した。二年次より文・理系二コースに分け、また、三年次には演習科目や選択科目を多く取り入れた。附属高校としての高大一貫性を根底に置くとともに、他大学その他の進路をとる生徒にも適応できるように配慮している（表一）。さらに、六三年度より教育課程検討委員会が設置された。

クラス編成は、開校当初は学力差が大きく、就職希望者も多いことから普通クラスに対して進学クラスを二つほど作らざるを得なかった。また、女子生徒が少なかったため女子クラス・男女混合クラス各一〜二を含み編成された。この状況が教育活動において、どういう影響があるかという論議の中で、進学クラス・普通クラス（就職）の編成は、生徒の間に微妙な差別感を生むムードがあったので、五二年度よりこれを廃止し、男・女クラスともそれぞれ均等に

表-1 昭和63年度教育課程表

教科科目	学年コース	基準	一年	二 年		三 年		備 考
				文	理	文	理	
国 語	国語 I	4	5					※教育課程は年度により 改定することがある。
	国語 II	4			4		3	
	国語表	2				2	2	
	現代文	3		3		3		
	古文典習	4		3		3		
社 会	社会	4	4					
	現代史	4		4	5			
	日本史	4		4				
	世界史	4						
	地理	4				2		
	倫理	2				3		
	政治	2					3	
	社会演習 I (国)					3		
	社会演習 II (国)					3		
	社会演習 III (世)					3		
数 学	数学 I	4	5					
	確率統計	2					2	
	代数幾何	3			3	3		
	基礎解析	3		3	4			
	微分積分	3					5	
理 科	理科 I	4	5					
	理科 II	2						
	物理学	4		4	3		4	
	化学	4		4	3		3	
	生物学	4						
	地学	4						
	理科演習 I (化)							
	理科演習 II (物)							
保体	体育 I 健	7~9	4(女2)	4(女2)	3	3	3	
	保 健	2	1	1	1			
芸 術	音楽 I	2	2					
	美術 I	2	2					
	書道 I	2	2					
外 国 語	英語 I	4	6					
	英語 II	5		6	6			
	英語 II B	3				4	4	
	英語 II C 演習	3				4	3	
家庭	家庭一般	4	女2	女2				
L H R			1	1		1		
合 計			33	33		33		

割り振った。進路別からA（文系）・B（理系）コース（五二年度）、A（私文系）・B（国文系）・C（就職）・D（理系）コース（五三～五六年度）と分けたこともあるが、その後は文・理系におさまった。さて、女子生徒が増加してきた六〇年度入学者より男女共学八クラス・男子四クラスとし、翌六一年度入学者より全クラス共学とした。ここに「男女共学の高等普通教育」の目標を実現することとなった。

次に、習熟度の試みも五七年度より数学を、五九年度より英語を実施して、それなりの効果もあったが、東洋大学推薦の面から問題点も生じ、六〇年度をもつて一応中止した。年々入試時の生徒の学力差も縮まり、六一年度より選択制を効果的に指導することによって、習熟度の問題を解決する方向でできている。一例として理科科目で「理科選択の手引」（六一年度）が作られた。

現在、進路指導は教科学習、ホームルーム、カウンセリングの三つの柱を中心にして、その徹底に努めている。進路講習は年間計画により、一年は学年単位で、二・三年は進路指導部が立案し、教科の協力で実施している。さらに全学年に「夏期進路講習会」、三年生に「夏期就職指導講習」を実施し、「基礎学力養成講習会」「大学推薦入学合格者特別講習会」も行っている。そのほか、学校行事は大切な教育活動であり、宿泊学習・学園祭・体育行事・芸術鑑賞・修学旅行・講演会など、内容を精選し実施している。

2 クラブ活動と生徒会活動

開校当時結成されたのは運動部七、文化部二の九部であったが、昭和六三年度現在では運動部一九部（野球、空手、柔道、卓球、サッカー、男女バレー、ラグビー、陸上、レスリング、バスケット、剣道、弓道、水泳、バドミントン、軟式野球、男女硬式テニス、軟式テニス、ボート、ダンス）、文化部一六部（英語、演劇、華道、茶道、吹奏楽、歴史、地学、写真、

美術、囲碁、無線、文芸、琴、軽音楽、哲学研究、漫画研究、同好会五団体（数学研究、科学研究、キャンプ、スケート、座禅）の多きを数えるに至った。

運動部の活躍

野球部は、四七年夏の東関東大会出場（銚子商業に二―で惜敗、甲子園出場を逸す）、五〇年春県大会優勝・関東大会出場（桐生高校に五―〇と快勝、選抜優勝校習志野高校に三―二で惜敗）をなし、県南強豪の一角に入った。空手部は、四九年関東大会組手団体二位、五一年同三位、五三年組手個人一位（鈴木勉）を記録した。卓球部は四八、四九（男子シングルス・ダブルス各三位）、五〇、五三年と関東大会に出場した。

レスリング部は、四二、四六、四八、五〇、五一（五二キロ級野口秀雄一位）、五八、六〇、六二年関東大会、四二、四五、五〇年国体、四五年インターハイに出場、特に四五年国体での活躍（大貫進四八キロ級三位・古谷正一八二キロ級三位）や、五〇年国体で活躍のちに五六年全日本選手権優勝者となる田谷久男を輩出したことは印象に残る。

陸上部も、五五、五六、五七、五八、六〇、六一、六二、六三年関東大会、五六（坂秀明、五種競技四位）、六一、六三年インターハイ、五五、五六、六一年国体に出場した。剣道部も五一年関東大会団体八位となった。四七年にインターハイに出場したサッカー部は、のちに読売クラブで活躍し五三年春の日本選抜チームに選ばれた浜口和明を生んだ。バスケット部も五〇、五二年と関東大会に出場した。男子バレー部は五二、五三、五五、五六年の活躍めざましく、特に五三年は関東大会五位、インターハイおよび国体に出場し、五五、五六年（決勝トーナメントに進出）はインターハイに出場した。弓道部も六〇年にインターハイに出場した。水泳部は、五〇、五一、五二、五七、五八、六一年関東大会に出場、特に、五〇年は大橋勇次が国体に出場している。

四四年創部のボート部は、霞ヶ浦で力を磨き、霞ヶ浦で散った。四六〜五三年の八年間のインターハイおよび国体の連続出場は、本校の誇りだった。特に、四八年はともに六位、四九年はインターハイ一位・国体三位、五三年は国

体五位と華々しい成績をあげた。その後も、五五年インターハイおよび国体出場、五六年インターハイ四位、五八年国体出場と重ねた。悲しいかな、六〇年二月一八日の三名の死者を出す霞ヶ浦遭難事故であった。以後活動を休止している(平成元年度より廃部)。そのほか、柔道部・ラグビー・バドミントン・軟式野球・硬式テニス・軟式テニス・ダンスの各部も多くの生徒が集まるところであり、今後の活動が注目されている。

附属高校として教学面の充実が要求され、五二年度よりスポーツ特待制度を廃止した。部活動も、教科学習の延長として、生徒の自主的実践的態度を養う、望ましい集団活動の場として、多数の生徒が参加できるようにと、大きく変った。その結果、多くの部が生まれることになった。運動部においても、健全なスポーツ活動を通して、人間としての生き方や個性・能力の発見を目指すようになった。

文化部の活動

文化部は、秋の文化祭(四一年度より「創造祭」と称呼)に焦点を据え平常活動をしている。伝統のある歴史部と吹奏楽部を中心に紹介する。

歴史部は、毎年生徒が身近なテーマを一つ設け、調査研究、夏季巡検、創造祭展示、研究誌発行を主要活動としている。詳細な研究や展示方法の工夫も高校生の域を超えるものがある。また、それらをまとめた研究誌も、四一年度の第一号「水戸の歴史」に始まり、「源氏三代」「明治維新」「明治の日本」「戦国の世」「武士の登場、赤穂事件」「平家の興亡」「徳川家康」「覇者の時代」「日本の城郭」「平家物語」「関ヶ原合戦」「歴史部の歴史」「戊辰戦争」「伊達政宗」「上杉謙信」、そして六三年「徳川三代——その遠く重い道——」を数えている。

吹奏楽部は、四一年の創設で、一日も欠くことなく活動し、厳しい練習を通してチームワークと奉仕の精神を体得している。創造祭参加、定期演奏会、夏季野球大会での応援活動、牛久市カップば祭りパレード参加、県高校吹奏楽コンクール出場、入学・卒業式時の式歌演奏等を活動の中心としている。定期演奏会も近年、取手市民ホール、さらに

牛久市民センターホールが完成して後は、ここに会場を移して行われ、市民の楽しみともなっている。県高校吹奏楽コンクールA部門で、四二―五九、六一年に銅賞、六〇、六二、六三年には銀賞と常に上位に入賞しており、その実力は高く評価されている。

そのほか、四一年創部で市内高校合同公演や第六学区高校連合演劇祭にも参加している演劇部、四二年創部で近年県南展・県展で入選者を多数だしている美術部も活動を広げている。また、創造祭で人気の軽音楽部・華道部・茶道部・琴部、校内展示や撮影旅行で楽しい写真部、高校野球シーズンともなると球場―本校と交信し、いち早い情報を提供してくれた無線部、同好誌を作っている漫画研究部、機関誌「愛理」を出している哲学研究部、英会話や英語劇などを楽しむ英語部、機関誌「フロリスト」を出した文芸部、天文部より発展した地学部、連日熱戦展開の囲碁将棋部など、実に多彩である。また、部活動とは異なるが図書館における図書委員の活動、同館主催の読書感想文募集（県コンクールでも毎年入選）、国語科主催の校内短歌コンクールは、文化活動の恒例となっている。

生徒会活動

生徒会発足は、昭和三九年開校の年の五月二日である。機構も徐々に整備され、四一年の「学校要覧」によると、生徒会長のもと、生徒総会、評議委員会（学級代表各二名）、中央執行委員会（総務・会計・図書・新聞・運動・文化・風紀・監査・美化の九部会を統括）があり、独立機関として選挙管理委員会が設けられた。五一年には機構改革とともに規約も成文化された。「本校の教育方針に則り、全生徒の総意を結集し、本校の教育効果を向上発展させること」という目的が明示され、学校長を最高顧問、教員を顧問として、従来より生徒の自主活動を前面にだすことが総会で決定された。

生徒総会・評議委員会は従前のとおりだが、執行部は会長一、副会長二、書記二、議長一、副議長一よりなる中央委員会へ、各種部会は運動・美化・保健・広報・文化・応援各部からなる専門委員会（保健・新聞・放送・運動部・文

化部・美化・応援の七委員会)に改めていった。そして、専門委員長会を置き各専門委員会からの問題点を吸収させた。また、独立機関として、創造祭運営委員会・選挙管理委員会・会計監査が置かれた。五七年には顧問会・部長会議が新設され、創造祭運営委員会は廃止、中央委員会で執行されることとなった。その後も多少の改正はあるが、基本的には土台ができたといえる。生徒の自主活動を尊重して、学校行事の一つである体育祭・創造祭は、企画・運営を生徒会に移行し、顧問教諭指導のもと実践している。

また、頭髮問題・服装問題等の生活指導面についても、自主的にアンケート調査をしたり、生徒の立場と自覚を秘めて学校の教育環境の整備に積極的に臨もうとしている。一方、新潟地震をはじめとする災害やユニセフへの募金活動や、赤十字の献血運動への積極参加、通学路のゴミ拾いや花壇の手入れ等の美化活動など、社会奉仕も活動の中に取り入れている。献血協力については県・市・赤十字より感謝状を受けている。

三 運営の変遷その他

施設・設備

開校まもなく、初代校長福原富三郎のもと、昭和三十九年七月着工した一号館(鉄筋四階)の工事も三期にわたり四二年三月完成を見た。この間体育館の建設もあり、一〇月一四日竣工落成式を挙行了した。

その後松岡節郎校長時代には、宮台学寮・作法室・運動部室・合宿所・食堂・校舎二号館(鉄筋三階)各棟の建設をなし、一応の施設整備を終えた。広畑一雄・剣持通夫校長時代は、部活関連の設備充実と環境整備が図られ、弓道場の開設、テニスコート二面・バレーコート一面設置、艇庫・野球場の用地取得と建設、駐輪場新設・一号館屋上防水・校庭コンクリート擁壁新設・トラック整備・体育館床張り替えの諸工事を進めた。田村晃祐校長時代は、弓道場・部室・

駐輪場の全面改修を行った。

さて、五八年度は本校創立二〇周年に当たり、その記念行事の一つが三号館（鉄筋四階）建設と一・二号館の改造工事であった。校地を拡張し、四月より一月までの三号館建設も成り、二月一〇日、増築校舎落成式を兼ね、創立二〇周年記念式典を新館二階の近代的感覚の講堂で盛大に行った。並行して進められていた一・二号館の改造工事も年度末には完了した。五九年度は三号館中庭整備工事も行い、その年の卒業記念として卒業生より学祖井上円了先生胸像が贈られ、除幕式も挙行された。一連の記念事業の後を受けた張替勇校長時代は、一号館の補修、体育館照明工事、車庫新設、グラウンド整備および散水設備工事、職員駐輪場新設などを行った。そのほか、従来借地していた野球場が狭いためこれを廃し、六二年新たに市内久野地区に野球場を設けた。

このように校地・校舎の整備も進み、校地は、四〇年に三万三三六九・六平方メートルだったのが六二年には六万五〇九九・五四平方メートルになり、グラウンド（トラック）のほかテニスコート二面、バレーコート一面、弓道場、野球場などがある。校舎も一号館（管理棟・教室・化学実験室・保健室など）、二号館（音楽室・柔道場・剣道場・空手道場・レスリング場など）、三号館（図書館閲覧室・司書室・視聴覚兼L教室・図書研究室・講堂・食物実習室・被服実習室・生物室・物理室・美術室・書道室・各準備室・会議室・教室・演習室・資料室・職員室・ commons などの図書館棟・特別教室棟・普通教室棟からなる）、体育館、食堂、部室、作法室と揃ってきた。六三年からは新たな計画に従って、施設・設備の充実に努めている。硬式テニスコート六面新設、社会科教室やCAI教室の設置、学年別職員室増設など、教育環境の整備が七代校長横田尚義のもとで計画されている。

生徒数の推移

昭和三九年の創立当初、定員一五〇名で出発したが、生徒募集関係者の労により第一回入学生三六一名（内女子五三名）を迎えた。その後も地域へとけ込む努力を重ねながら、生徒定員の増加を図

り、地道ながら県内私立高校の中でも安定した歩みを続けている(表12)。入学者の質的向上を図るためにとった入試の影響で、五二年度入学者二八七名(男子二四二名、女子四五名)、五五年度入学者三九四名(男子三〇六名、女子八八名)と、大きく定員を割った年もあったが、各年度の総定員は常に確保しており、むしろこの期を通して、学力向上への質的变化をもたらしたといえる。それは、五一年三月広畑一雄校長の就任からである。学校経営は従来の基礎作りの段階から教学充実の段階へと発展するため、大学の教学サイド、特に現職教授を校長に迎えての一変革期であった。進学校への脱皮を目標に置くようになり、健全な、明るい学校作りが展開され、現在もその努力が続けられている。

この間の入学定員の変更をみると、四三年度より三〇〇名、四九年度より四五〇名、六三年度より五五〇名へと増員された。六三年度の学校規模は、学則定員一四五〇名に対し、一年生七二二名、(内女子二三九名)一五学級、二年生六三七名(内女子一九一名)一三学級、三年生五一九名(内女子一八〇名)一一学級、合計一八六八名(内女子六一〇名)三九学級となっている。女子が三二・七%を占めるに至った。

進路状況の推移

昭和四二(一九六七)年三月三日、第一回卒業生三〇四名を送り出した。進路内訳を見ると、就職〇名で、就職者が五九・二%、大学進学者二〇%、各種学校三・三%で、就職志向の状況であった。五〇年度第一回卒業生は四八五名で、就職者一七〇名(三五・一%)、大学進学者一五七名(三二・四%)、各種学校七六名(二五・七%)、家事その他が八二名と、就職者、進学者の数が接近してきた。六三年度第二三回卒業生は五一二名、大学進学者二〇七名(四〇・四%)、各種・専修学校進学者九八名(一九・一%)、就職者一八名(三・五%)、家事その他一八九名(三六・九%)である。さらに毎年度の数値を詳細に分析してみると、いくつかの特徴を挙げることが出来る。

大学進学率について見ると、第一回生から第五回生(四六年三月卒業)までは一〇%台を上下していたが、第六回生

表-2 卒業生数

卒業回	年 度	男 子	女 子	計
1	昭和41年度	270	34	304
2	42	336	71	407
3	43	322	61	383
4	44	264	38	302
5	45	295	80	375
6	46	306	45	351
7	47	310	92	402
8	48	315	94	409
9	49	322	61	383
10	50	407	78	485
11	51	462	102	564
12	52	373	48	421
13	53	378	64	442
14	54	223	54	277
15	55	421	102	523
16	56	363	106	469
17	57	284	82	366
18	58	408	106	514
19	59	398	135	533
20	60	295	106	401
21	61	583	223	806
22	62	401	180	581
23	63	334	178	512
計		8,070	2,140	10,210

から第九回生（五〇年三月卒業）までは二〇％台を、第一〇回生から第一二回生（五三年三月卒業）までは三〇％台、そして一三回生（五四年三月卒業）は四〇・三％と、一応四〇％の壁を破ることとなった。特に、翌一四回生（五五年三月卒業）と第二〇回生（六一年三月卒業）は、五一・三％を記録した。ともあれ本校の進学率は、東洋大学推薦入学の百分比と連動するものが現況である（表-3）。この百分比の推移を見ると、第一回生から第五回生までが九％前後、第六回生から第十一回生までが一四～五％、第一四回生の二八％の特例（在籍数が定員を割ったため、定員に対する推薦枠とされた）を除くと、第二二回生（五三年三月卒業）より現在まで一九～二〇％という実績である。

一方、卒業生の就職者率は急速に低下

表-3 東洋大学推薦入学・他大学合格概況

		進 学 者 数																											
		東 洋 大 学 推 薦 入 学 者 数																											
学部	学科	文				経済	経営	法	社 会				工				短 大				東洋 大 合 計	他 大 学	他 短 期 大 学	総 合 計					
		哲	イ ン ド	中 国 哲 学 文	英 米 文	教 育	経 済	経 営	法 律	経 営 法	社 会	応用社会			機	電	応	土	建	情					日	英	観		
		学	文	文	文	史	史	史	商	商	法	会	マ ス コ ミ	社 会 福 祉	社 会 心 理	図 書 館	工 工	機 械	電 気	用 木					築 工	報 工	文 文	本 本	文 文
41					1	1	3	2	2	3	4	2		2		1		2	1	9		1	1	2	37	15		52	
42				1		1	1	3	3	4	4	5	3		3	1	1	1	2	1		1		1	36	15	3	54	
43				2		2	3	3	3	4	1	3	3		3	1	1	3	2	2					36	26	1	63	
44				2		1	2	3	3	4	1	2	3		3	1	1	1		1		1			29	8	3	40	
45		1	1	2		1	4	3	2	1	3	3		3		1	1		2	2		2	1	2	35	24	8	67	
46	1	1	1	1	1	2	4	4	5	3	4	6		8		1	1	1	1	2			1	1	49	30	5	84	
47	1	1	2	2	2	2	6	4	6	4	5	4		9			2		1	2		3	2	2	60	49	7	116	
48	1	1	1	4	2	3	5	5	5	5	5	5	2	2	3	1	1	2		2	2		1	2	1	61	42	11	114
49	1	1	2	1	1	3	5	5	6	4	6	5	1	2	3	2	2		1	2	2		2	1	1	59	41	10	110
50	1	1	3	3	1	4	8	6	8	5	8	6	2	4	3	2	1			2	3		2			73	76	8	157
51	1		4	4	1	4	8	7	7	7	8	7	3	4	4	4	2	2	2	1	2	2		1	1	86	65	18	169
52			5	2		3	9	7	7	7	8	8	5	5	4	4		2	2	1	2	1				82	56	10	148
53			2	1	2	4	12	8	8	7	9	7	5	2	4	5	2	2	2		2	2		2		88	74	8	170
54	1	1	4	5	1	3	13	1		8	10	9	2	3	3	3		2	1	1	2	1	4	2		80	58	10	148
55	1	1	5	5	1	4	13	6	5	7	8	8	3	3	5	4	2	2	1		1	1	4	7	5	102	76	15	193
56			4	4	1	5	12	5	6	7	4	5	3	1	5	1	1	3		1		2	5	2		77	71	13	161
57	1	2	6	5	1	4	11	5	2	7	7	4	3	4	2	3					2	2	3			74	63	21	158
58	1	1	2	4	1	5	13	4	5	10	7	8	5	4	4	3	2	3		3	3	3	5	2		98	78	12	188
59			5	6	1	5	15	6	3	11	3	10	7	6	7	2	1	2	2	1	3	1	2	5	3	107	72	29	208
60	1		6	6	2	4	10	6	4	10	4	4	5	2	4		2				2	2	6			80	97	30	207
61	1	2	9	9	2	8	21	8	6	14	9	8	8	5	7	6	3	3	2		3	3	8	9	7	161	99	34	294
62			10	6	2	4	13	2	1	7	7	12	6	1	6	2	6	4	3	2	4	4	4	4	6	116	73	46	235
63			9	11	1	2	17	7	6	5	4	6	6	3	7	4	1	2	2	1	2	2	3	5	4	110	64	33	207

した。第四回生までは五〇%以上だったのが、第五回生から第九回生までは四〇%前後、その後減少が続き、六一年三月卒業の第二〇回生以降は一〇%を割り、六三年度第二三回生に至ってはわずか三・五%である。ところで、大学進学者・就職者の推移のなかで当然目立ってくるのが、各種・専修学校の伸びと家事その他の伸びである。しかし各種・専修学校は、各卒業期の実数は伸びているが、卒業生数に対する比率は常に一五〜二〇%を前後している。「家事その他」について見ると五二年三月卒業第一一回生以降は、卒業生数に対して、常に二〇〜二五%を占めている。

人事・校務分掌・教職員構成 まず、歴代校長・副校長・教頭・事務長について表示する。

年度	校長	副校長	教頭	事務長
昭和 三九	福原 富三郎 三九・四一 四五・三三	伊藤 泰治	土屋 重徳	井出 耕太郎
四〇〇四三				
四四	松岡 節郎 四五・三二	松岡 節郎	田代 通広	山本 了
四五				
四六	松岡 節郎 四五・三一		(代行) 舟木為三	吉田 登美穂
四七〇四八				
四九	舟木 為三	舟木 為三		
五〇				
五一〇五三	広畑 一雄 五一・三一 五四・三三			

五〇 事務主事を置く（事務長欠く）。

五一～五九 事務主任を置く（事務長欠く）。

五二～五四 教務主任を置く（副校長・教頭欠く）。

	五四	五〇	五六	五七	五八	五九	六〇	六一	六二	六三
横田尚義	五〇持通夫	五四・四一	五七・三一	五八・四一	五九・四一	六〇・三一	六一・四一	六二・三一	六三・四一	六四・四一
	奥沢寛一	張替勇	大山岩男	佐々木良一	大平徹	大平徹	大平徹	大平徹	大平徹	大平徹

教科会・学年会を置き、機能的にすっきりとした形となった。五七年度にPTA・同窓会が外郭団体として独立したが、五八年度より渉外部の中に組み入れられ、従来の渉外部の仕事は広報部に移された。六〇年度にも若干改組された。事務長が置かれ、事務室は校長直属となり、生徒指導部から保健衛生が独立し保健厚生部が置かれた。また、副校長が廃止され教頭制となった。その他新設されたものを見ると、六二年度に主事主任会議、六三年度にテレフオンサービス（渉外部に設置）、主任会議（教科・学年）と委員会（学力向上対策・教育課程検討）等がある。創立以来二〇有余年を経て確立した分掌組織ゆえ、今後は実効面で鋭意工夫努力されよう。

次に、教職員構成を見ると、創設の三九年度は校長・教頭・事務長各一名、教諭七名、講師九名、事務員二名、用務員一名、計二二名で終始した。四〇年度計三七名、四一年度計五三名（校医を含む）と増員されたが、草創期のこと最初の一〇年間は専任教員の増員はほとんどなく、講師の補充で乗り切ってきたのが実情であった。四八年度松岡節郎校長時代より専任の充実が図られ、四七年度専任教諭二三名が四九年度には三四名となり講師の数を上回った。その後も増員が図られ、六三年度には校長・教頭・事務長各一名、教諭五四名、専任講師一名、兼任講師三二名、事務室七名、嘱託四名、臨時職員二名、団体職員二名、校医三名、薬剤師一名、警備員二名、計一一〇名となっている。五八年度より教員採用試験も強化され、優秀な若手教員が採用されている。また、今後の問題として、国際化、生徒の進路の多様化、情操教育の充実等の面から、さらに、専任教諭の増員、特に英会話、第二外国語、芸術（美術・音楽・書道）、コンピュータ教育に専任教員の就任が求められよう。

教職員研修

生徒の学力向上のソフト面として、教職員の研修活動は不可欠である。本校は各自の自己研修を基盤としながら、全学的研修活動の盛り上がりを図るため、当初教務部または図書研修部にあったものを、五五年度より「研修部」を独立させた。現在実施している活動を挙げると、まず校内研修としては、新採教員実務研

修（四月）・主任主事部長研修会（六月）・夏季研修会（夏季休暇中）・新採および二年次教員研修会（秋）・その他（外部研修会参加報告会、ビデオによる交流分析学習会、同和教育研修会、パソコン操作講習会等）がある。特に夏季研修会は、本校の教育問題について討議し、さらに教育についての講演を催したりして、教職員の全体研修の実をあげてきた。

校外研修についても県新採教員研修会参加・茨城県高校教育研究会（茨高教研）・私中高連および私立教育研究所研修会など近年積極的に参加している。また、海外研修も毎年一名派遣すべく予算が組まれている。そして、教育研修の成果の一つとして、五一年度より「紀要」を発行している。専門的教育研究誌というには必ずしも充分とはいえぬが、号を重ね六三年度は第一二号を数えるに至った。そのほか、附属校として、東洋大学を中心に多くの教育実習生を受け入れ、研修の一端として全教員が協力し参加している。

後援会・PTA、同窓会

本校の教育活動において、物心両面で大きな支えになっているのが後援会とPTA組織である。「父母と教職員が一体となって、生徒の福祉増進と本校教育の向上発展を図る」ことを目的としてPTA組織（初代会長寺田一）は、昭和三九年四月第一回入学生を迎えると同時に発足した。初年度は、女子制服制定の件や後援会結成の件等、学校の基盤整備の諸問題が取り上げられた。後援会結成の件は、寺田会長自ら結成準備委員長となり、一二月一八日の後援会結成総会によって、発足した。会則第二条にその目的が明示され「教育に関する諸事業を助成完遂すること」を謳ったが、当初は生徒活動の後援と体育館建設推進を具体的な事業目的とした。会長には当時の宮本進牛久町長、名誉会長には川村衛前町長が就任した（以後、後援会会長には現職町長・市長が就任することとなった）。宮本会長時代（39・12・18～50・10・2）の主な事業として、四二年の体育館兼講堂の建設、四八年の第二校舎（現二号館）の建設があり、第二代大野正雄会長時代（50・10・3～）では五三年の野球場建設、五四年の艇庫の建設がある。

さて、再びPTAについてみる。歴代会長を挙げると、初代寺田（三九〇四一年度）にはじまり、渡辺正二（四二年度）・中丸一郎（四三年度）・太田恒太郎（四四年度）・坂本徳司（四五、四六年度）・関野勇（四七年度）・大野正雄（四八年度）・石塚昇（四九、五〇年度）・永島秀恭（五一〜五三年度）・宮本日出雄（五四、五五年度）・下山田虎之介（五六〜五八年度）・樽井忠男（六〇年度）・池田浩二（六一、六二年度）と継ぎ、六三年度により一四代会長に佐藤安樟が就任した。この間、四一年度の会則では、組織の目的を達成するための事業が明記（第三条）「教育に関する調査研究、教育施設および福利厚生施設の完備、講習会・講演会・研究会等の開催、社会事業への協力、会員相互の親睦、進学就職指導幹旋、その他必要な事項」され、さらに四四年度の会則では、これに「生徒募集への協力」の一項が加えられた。また五五年度には会則に「PTA支部規定」「PTA生徒指導委員会会則」「学年PTA規約」が設けられ、PTA活動の充実と発展が図られた。特に五七年度は下山田会長のもとで、支部活動や会報の充実、今後の活動のあり方と実践、研修会・講演会・校外視察の諸問題が討議され、PTAの活性化が図られた。六〇年代になると活動範囲も拡大し、総会・評議委員会・学年PTA・講演会等の校内活動はもとより、支部活動・PTA役員研修・茨城県高P連・関東高P連・牛久市小中高P連・県南高P指導者協議会・県私学父母の会・県高P私学部会等の校外活動および地域連合活動にも積極的に参加している。また、六二年度よりテレフォンサービスを開始し、父母、すなわちPTA会員への便を図った。

本校の同窓会は、昭和五七（一九八二）年八月第一回総会がもたれ、会則および役員を決定し、発足した。初代会長に平島義広（一回生）が任じられた。その後は、入学式・卒業式などで会長の励ましの祝詞に接したり、特に五八年には、本校二〇周年記念事業の一つとして、「卒業生名簿」編纂、記念祝賀会・記念座談会の実施などが行われた。五九年の第三回総会で二代会長小林良雄（一回生）を選出し、六一年九月同窓会報を創刊した。近年、卒業生を多く世に送り、各界での活躍を見る時、今後とも組織の実効性と活動が期待される。

四 現状と課題

教育課程の検討と改訂

本校は、東京近郊都市の性格と地方都市の風土を併せもつ地域にあり、教育に対する父母や地域の考え方も多様である。また入学生徒層の実態からも、本校の教育のあり方については、大変難しい問題も伏在する。

第一に、父母の最大の関心は大学進学への期待であるが、現在、東洋大学への附属推薦枠は上位者二〇%である。近年、東洋大学をめざしての単願者増加の現象にあるが、大学推薦枠の制限から高学力者層は微増傾向にとどまっている。附属推薦枠の拡大を可能にするための基礎条件としては、内部努力による在学生、とくに中間層の学力向上を図り、進学実績を上げる必要がある。

第二に、附属高校として、建学の精神を基に基礎教育の徹底を図り、豊かな情操と主体性をもつ有為なる人材を育てることである。今日までの発展があるにしても、現実には、同一学齢者の基礎学力から見ると、本校生は中の上から中の層である。本校の教育は、学習に重点を置き、上級学校進学により世に役立っていく人材の育成を目指す部面と、人間教育を主として、地域に貢献する人材の育成を目指す部面とがある。この両面を考慮して、それぞれのところを得させることが大切である。

第三に、以上の二点から、教育課程の検討には充分意を尽くしていかなければならないことである。文系コースの生徒が圧倒的に多く、その個性や能力、志願等が多岐にわたり、まさに教育課程の再検討が望まれる。必修科目を土台として、文系コースは国語・理科・外国語を、理系コースは数学・理科・外国語を中心に学習するという重

点履修科目の設置と、その履修単位の増加を図るとともに、超教科間の総合選択科目や演習科目の配置、なかでも、外人教師による英会話と第二外国語選択、美術科専任教員採用による情操教育の充実などが、現在成案として準備されている。

第四に、附属推薦者順位の算出基準の改訂も検討しなければならない。従来の方法より、高学年加重、附属共通実力テスト重視の方式に移行し、教育課程の改訂とあわせて、生徒それぞれの勉強意欲と学力向上を図ることである。

以上の四点は、現在の横田校長のもと、最新の分析とともに実施を前提とした検討が進められているところである。今後とも、学校教職員の総力を挙げて、大学との連係を緊密にとりつつ、自助努力を惜しまず発展を期するものである。

(梨本 優)